

# 蜂須賀正韶と笛子

——下田歌子研究（二）——

下田歌子の周辺には多くの人がいる。それらの人々との間に交された書簡は、相互の関係を示す手がかりとなり、歴史的事実の記録になるなど資料としての価値は大きい。筆者は数年前に大正六年十月、芝区三田綱町の蜂須賀笛子に宛てた下田歌子の書簡を入手した。また昨年笛子の父蜂須賀正韶と実践女学校の関係の一端を示す資料を入手することができた。本稿では蜂須賀正韶・次女笛子と下田歌子の関係を考察したい。文中の書簡の（ ）内の数字は、実践女子大学・実践女子短期大学部図書館下田歌子関係資料（以下下田資料と略す）で所蔵する書簡の資料番号である。

## 大井 三代子

### 蜂須賀家の人々

芝区三田綱町の蜂須賀家本邸には、祖父茂韶、祖母随子、父正韶、母筆子、長女年子、次女笛子、三女小枝子、長男正氏が暮らしていた。茂韶以降の蜂須賀家については、『徳島市立徳島城博物館収蔵資料目録 第一集 蜂須賀家寄贈資料』に収載されている「解題」徳島市立徳島城博物館収蔵蜂須賀家寄贈資料について」と「近代蜂須賀家 略年譜」（以下略年譜と記す）によって概観することができる。また年子の著作『大名華族』（三笠書房 昭和三十二年）には、華族としての蜂須賀家の生活や習慣などの様子が書かれており興味深いものがある。これらの著作を参考に、蜂須賀家の人々についてまとめてみた。

蜂須賀家は蜂須賀小六正勝を祖とする。蜂須賀至鎮は、慶長五年（一六〇〇）九月関ヶ原の戦いの功績により徳川家康から所領を安堵された。それとともに父家政から家督を相続し、阿波国徳島藩初代藩主となった。

徳川幕府十一代將軍徳川家斉は十三代藩主の蜂須賀斉裕の実父である。家斉は子沢山で、成長した男児は嫡男の家慶を除いて「ことごとく他藩に養子に出された。斉裕は二十二番目の男子であり、外様大名の徳島藩主蜂須賀斉昌の養子となり十三代藩主を継いだ。

その頃の徳島藩は財政が悪化して、一揆が起きるなど藩政が悪化しており、斉裕は藩政改革に取り組んだ。特に藩の軍制をイギリス式に改め、海防に力を注ぎ、岩屋や由良（洲本）に砲台の建築をし、海防における功績を挙げたため、文久二年（一八六三）十二月に幕府が新たに設置した役職である陸軍総裁に任命され、海軍総裁も兼任した。徳川家と血縁関係にあることもその背景にあったと考えられる。この就任は徳島藩に多くの出費をもたらすことになり、藩の財政は悪化した。斉裕はこの職をすぐに辞任し、後任は設置されなかった。幕末の動乱期にあって、斉裕は倒幕か佐幕か態度を明らかにすることなく慶応四年（一八六八）一月に徳島で死去した。

斉裕と山本珠の間に生まれたのが茂詔である。弘化三年



蜂須賀茂詔（1846～1918）

（一八四六）八月に生まれ、斉裕の死去後に十四代徳島藩主となった。明治十七年（一八八四）に徳島藩主であったので侯爵を授けられた。戊辰戦争など新政府側として活動した。明治二年（一八六九）に斐（あひ）（蜂須賀隆芳女、嘉永五年（一八五二）出生）と結婚する。明治五年（一八七二）一月から明治六年（一八七三）十二月まで、茂詔は斐を同伴して自費による海外留学をした。帰国後の明治七年（一八七四）に斐と離婚する。茂詔には侍女内藤いねとの間に長女多（まさ）、次女邦が生まれたが夭逝する。明治四年（一八七一）三月に蜂須賀家の後継者となる長男正詔が徳島で生まれた。母は同じ内藤いねである。

茂韶は、明治八年（一八七五）から明治十二年（一八七九）まで英国オックスフォード大学のベイリオル・カレッジで政治、経済学を学んだ。明治十四年（一八八一）五月に水戸徳川慶篤女随子（安政元年—大正十二年 一八五四—一九二三）と結婚、八月に敷地五万坪、邸宅二千坪の芝区三田綱町邸を購入した。明治十五年（一八八二）十二月には特命全権大使としてフランス駐在を命じられ、スペイン、ポルトガル、スイス、ベルギー公使を兼任した。その後も東京府知事、貴族院議長、文部大臣などを歴任している。また蜂須賀農場を経営するなど実業家としての活動もあった。大正七年（一九一八）二月に死去した。



蜂須賀正韶（1871～1932）

正韶は、『大名華族』によると明治十九年（一八八六）におつきをつれて英国ケンブリッジ大学に留学していたが、明治二十八年（一八九五）十二月に帰国し、徳川慶喜の四女筆子（明治九年出生）と結婚した。筆子は病弱であったためか明治四十年（一九〇七）、三十一歳で死去している。

坂本辰之助著『現代名士人格と修養』では正韶について「彼が道徳堅固なることは當世稀に見る所」と述べ、妻筆子の死去後に再婚せず、ほかの女性と関わずに深く謹んでいるので、周囲の名士も彼を激賞して敬服している。「家庭における彼は外国新聞雑誌を読むほか、二條公、浅野侯等と人類学の研究に熱心し、古墳を探り土器及石器を集めて楽しんで居る。また彼は令息令嬢の教育に餘念なく、洵に模範的貴公子である。」と述べている。ここに描かれている正韶は、地味で静かな性格で子供の教育に熱心な人である。昭和七年（一九三二）十二月に死去した。

年子は日常の行動でも正韶からやかましく注意されたと書いている。その叱責は午前一時二時になることもあったという。また年子は、祖父茂韶は昔のお大名らしく、幅のひろい鷹揚な人だが、父の正韶は正反対で、神経質で小心、律義さが偏執的になっていたと述べている。正韶は気が小さいというより几帳面で、蜂須賀家の当主として子どもたちを恥ずかしくないように育てなければならぬという思

いが強かったのではないだろうか。

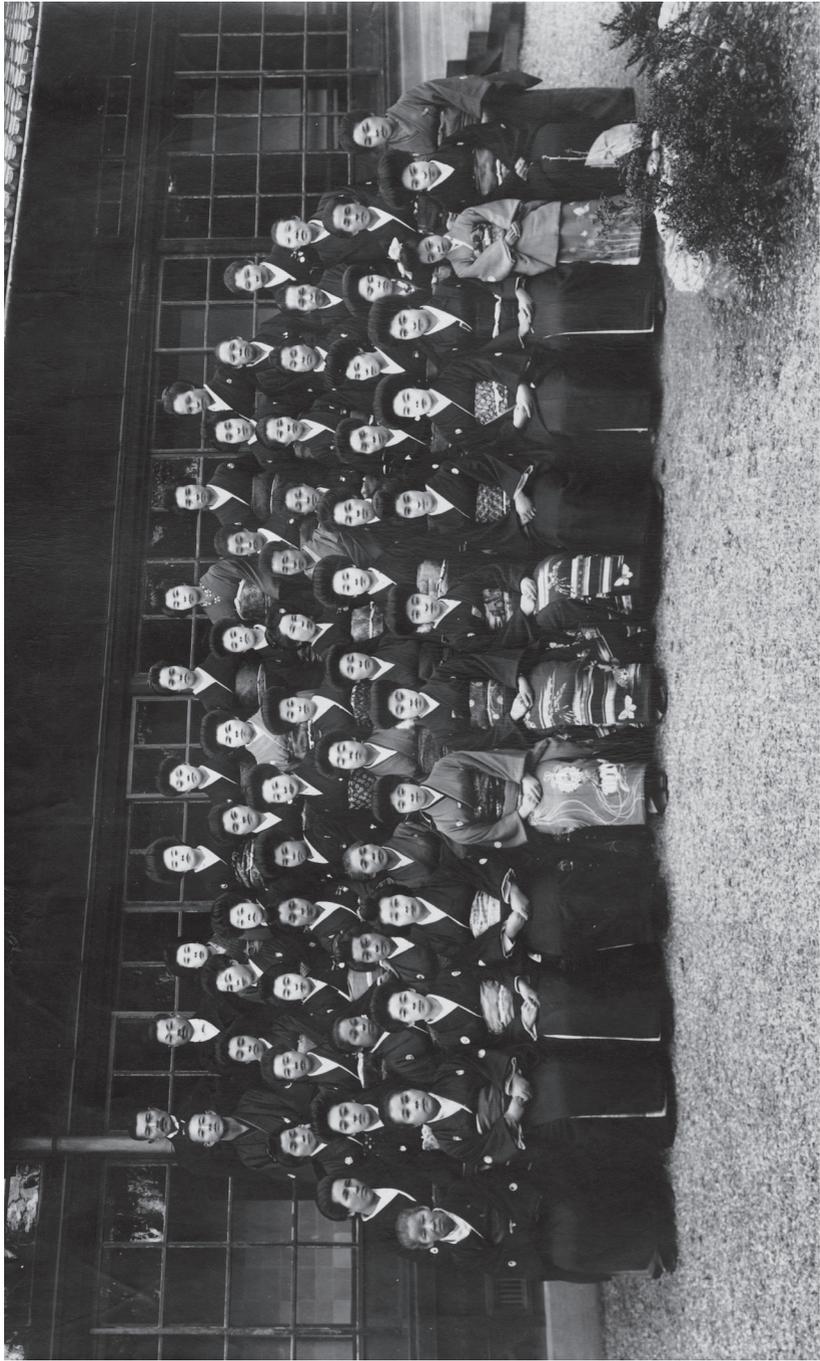
正詔は筆子との間に長女年子、次女笛子、三女小枝子、長男正氏の四人の子をもうけた。彼らには生まれる前に別名がつけられていて、年子には「小松」、笛子には「鳩」、小枝子には「桃」、正氏には「椿」と付けられていた。正氏の「椿」は女のおかしいということになり、後に「兜」と改められた。誕生に向けての産着などには、その別名の「おしるし」が付けられる。女中たちが正式に呼ぶときには「小松しるしま」のように「しるし」という言葉をつける。年子の父正詔は「春駒」、母筆子は「折鶴」、祖父は「若松」、祖母随子は「宝」である。

長女の年子は広い敷地の中を走り、木登りをするなど活発な女の子であった。母の筆子が死去した時、年子は十一歳であり、妹や弟たちから頼られる存在となった。時には父の話し相手になり、父の考えに反発し、自分の意見をはっきりという様子も描かれており、近代に生きる自我を持った一人の女性の姿を見ることができる。

『大名華族』に、年子は華族女学校を退学し、十六歳の四月に聖心女学院に入学したと書いている。明治三十九年（一九〇六）四月に華族女学校は廃して学習院と併合、学習院女学部と名称が変更された。明治四十年十一月に下田歌子が学習院女学部を辞職し、山口高等商業学校長松本源

太郎が学習院教授兼女学部長に任ぜられていた時のことである。退学の経緯は次のようなことであった。

その頃の学習院女学部は、春秋の運動会に女生徒が大勢でダンスをした。袴をはき、編み上げの靴を履いた女生徒が、銘仙の長袖の着流しで桜の造花の枝をかざしてカドリールを踊るといったものだった。日本ではダンスが一般社会に行われていず、華族女学校のダンスが評判になった。松本校長は、秋の運動会に入場料をとって一般市民にダンスを公開することにした。正詔は宮内省式部職式武官として華族女学校取締役であったので、このことに怒り、式武官であった浅野長之侯爵と学校に向いて松本校長を難詰した。二人は、運動会は皇后陛下、皇族妃殿下方がご臨席になる。運動会の競技やダンスは、その方々へご覧になれるものなのに、町の人々に有料で公開するとは何事か。私どもの娘は芸人ではない。入場券を売るのを取りやめ願いたい。ご臨席になる皇后、皇族方に不敬になる。校長の見解を伺いたいというものであった。それに対して、松本校長は、華族社会でダンス会やバザーを開催して、その収益を慈善事業に寄付する例は多くあり、さしつかえないし不敬とは思わないという答えだった。正詔は慈善事業に学校の生徒のダンスを有料で見せるという教育方針であるなら、今日限り娘を退学させるといった。



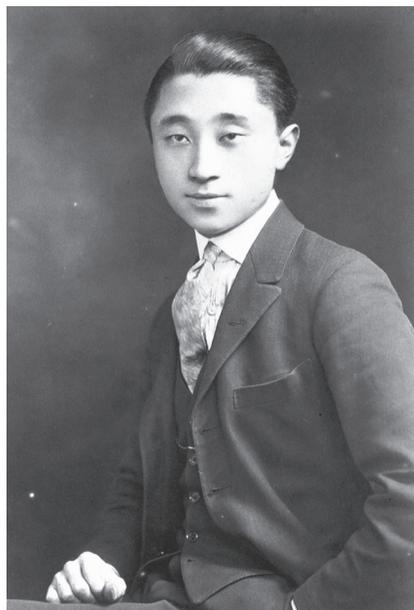
徳島公園内千秋閣にて  
前列中央峰須賀家三姉妹（個人所蔵）  
左 小孩子（1901～1922）、中央 年子（1896～1970）、右 笛子（1898～1937）

『女子学習院五十年史』の「卒業終了及修業者並入園者名簿」によると、年子は学習院幼稚園を修了し、明治三十六年（一九〇三）に華族女学校初等小学三級に入学、明治四十四年（一九一一）に退学している。年子の友達の浅野禮子（浅野長之女）は明治四十三年（一九一〇）に退学している。正詔から一年遊んで聖心女学院に入学するようにと言われたとあり、退学から聖心女学院入学の間があかないようにするために浅野禮子より一年遅れて手続きをしたと思われる。

年子は二十一歳の時に茂詔の定めた松平康晴と結婚、五人の子どもをもうけたが、昭和九年（一九三四）に正式に離婚した。五人目が男子であったので、自分の義務を果たしたような気になって蜂須賀家に帰ってきたと書いている。その後蜂須賀ホームズパン研究所を設立、岡貞貞治と共に編で『手芸事典』（東京堂出版 昭和四十二年）を出版する。昭和四十五年（一九七〇）十一月に死去した。

次女笛子は明治三十一年（一八九八）十二月に出生、昭和十二年（一九三七）九月に死去した。『大名華族』には笛子についての記述はほとんどないが、四歳の頃の年子と笛子が一緒に写っている写真が掲載されている。笛子については「蜂須賀笛子と下田歌子」で述べる。

三女小枝子は明治三十四年（一九〇一）四月に生まれた。



蜂須賀正氏（1903～1953）

子爵佐竹義種と結婚、大正十一年（一九二二）十月に二十二歳という若さで死去した。

正氏は明治三十六年（一九〇三）二月に生まれ、大正十一年（一九二二）にケンブリッジ大学に入学、鳥類の研究に没頭する。絶滅鳥ドードー研究の権威として知られた。またフィリピン諸島アフリカ探検などを行う。昭和八年（一九三三）二月に襲爵する。昭和二十年（一九四五）七月に華族礼遇停止を受け爵位を返上、昭和二十八年（一九五三）五月に熱海の別邸で狭心症のために急死した。蜂須賀家と下田歌子の交流はいつから始まったのかわからない。『現代名士人格と修養』には「侯爵蜂須賀正詔は、

英国ケンブリッジ大學に留学し、バチエル、オヴ、アーツの学位を得て歸朝し、宮内省に奉職して忠實に働いたので、皇后宮主事まで陞任した。然るに父の茂韶が薨去したゆへ、皇后宮主事も式武官も共に辭した。」とあるので、正韶が皇后宮職についてからのことなのだろうか。明治二十九年（一八九六）に茂韶が第二次松方内閣の折に文部大臣に就任しており、その頃の歌子は華族女學校に奉職しているので、文部省を訪ねることはあつたであろう。確証となる記録はまだ見当たらない。

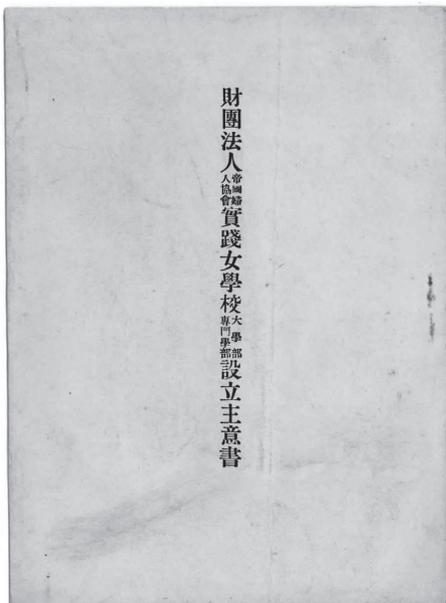
### 拡張事業と蜂須賀正韶

幹事囑託の竹内貞三（第三代理事長）は、大正十年の夏ごろに初めて実践女學校を訪れた時の印象を「本稿擴張十年計劃案に就いて」（「なよ竹」第二十号 昭和六年二月）の中で次のように記している。実践女學校の実態は旧態依然で、経営上に就いては前途に対する確乎たる方針が決まっていざ信條も立っていないかつたことに驚いた。そして日進月歩の文化時代に、經濟を度外視しては學校が成り立たない。立派な先生に授業を依頼できないし、設備がよくなければ優れた教育が行われることが困難である。それを解決するためには、確乎たる将来の計画を立てること、こ

れに應ずる適當の方法を講じ、校舎の拡張増築、諸設備の充實をはからなければならぬ」と下田校長に進言し、計画の輪郭だけを作成し渡したと記している。

数か月後に歌子は竹内貞三の計画を受け入れ、寄付金を募集することを決意した。大正十一年（一九二二）三月に「財團法人帝國婦人協會實踐女學校大學部専門學部設立主意書」（図）と「實踐女學校の既往現在将来」を作成して、この事業のための後援会を組織し、寄付金を集めることになった。

主意書の内容は、実践女學校の敷地の地続きである常磐



財團法人帝國婦人協會實踐女學校大學部専門學部設立主意書

松御料地の一部分である二千五百坪が大正十一年十月に払い下げになり、実践女学校の規模を拡張して大学令及び専門学校令に拠つて女子大学及び女子専門学校の増設を計画した。この計画はただ若い女性の知識欲を満足させるのではなく、牢固たる精神教育の基礎の上に高等専門教育を施し、品性才能を高め、時代に適応した婦人を養成して、欧米と比較しても劣らないようにしたい。根本に皇室中心主義をおき、体育に重きをおき、学理を研究し、學術の習得と実地の試練にいそしみ、長所を伸ばし、学んだものは実世間に応用執行できるようにしたい。そのためには設備にも資金があるので、趣旨に賛同していただき支援を願うというものである。後援会は実践女学校出身者櫻同窓會が發起者となり、事務所は実践女学校内に設置された。会長に蜂須賀正韶（侯爵）、副会長に本野久子が就任した。大正十一年七月一日付の「財団法人帝國婦人協會実践女学校擴張後援會趣意書」によると委員長に指田義雄、顧問に清浦奎吾（子爵）、洪沢栄一（子爵）、水野鍊太郎、床次竹二郎、河野広中、和田豊治、犬養毅、高田早苗が名を列ねている。明石為次宛書簡（五〇二五）には、清浦奎吾は「後援會顧問のほかに愛国婦人会顧問として歌子を支援している人として書かれている。

「實踐女學校の既往現在將來」の中の「將來の計画」に

よれば具体的な擴張計画は十三項目からなっている。

- 一 專攻課及高等師範部を完成し専門学校令に依て女子専門学校組織としてその設備を完成する事。
- 一 国文專攻科の一部に英仏及び支那朝鮮語を課する事。
- 一 女子高等学校を設置する事。
- 一 大学令により女子大学を設置する事。
- 一 高等女学部を擴張して約七百名を收容する設備をなす事。
- 一 実科高等女学部を擴張して約七百名を收容する設備をなす事。
- 一 附属小学校を設ける事。
- 一 家事科及び理科の実験室を設ける事。
- 一 各科の研究室を設ける事。
- 一 園芸課を設けて之より收穫する物を各科の実験に用い、且心身の修養に資する事。
- 一 新旧内外の學術技芸を授け、特に訓育体育に重きを置く事。
- 一 各種の体操及び戶外遊戯をも課し、心身の鍛鍊に重きを置く事。
- 一 地方に修養寮を設け、田園生活の趣味を体験せしめ

る事。

敷地の買収、校舎の増設、機械器具その他の設備などのためにまず百五十万円の資本金募集を企て、第一期事業(百万円)、第二期事業(五十万円)として女子大学設立の構想を立てた。寄付者には会長蜂須賀正詔、校長下田歌子の連名で「謝状」(図)が出された。

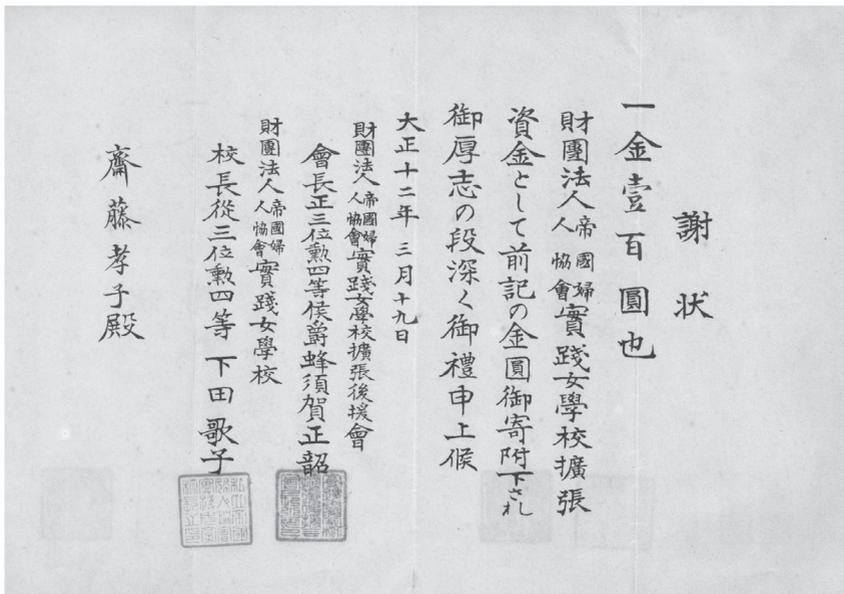
後援会からは会長蜂須賀正詔、副会長本野久子の名で挨拶状が作成され、「財団法人帝國婦人協會實踐女學校大學部専門學部設立趣意書」、「實踐女學校の既往現在將來」、「財団法人帝國婦人協會實踐女學校擴張後援會会則」が配布された。

「婦女新聞」に、この計画に関係する左記の記事を見る  
ことができる。

・大正十一年三月五日(一一三七号)

女學生に農園趣味

下田歌子女子経営の實踐女學校にては都会生活の欠陥を補ふため生徒に園芸趣味を養成せしめんと適當なる場所を詮衡のため、府下荻窪に約一町歩の空地を提供せんとの有志家あり職員生徒共になりて約五千坪の開墾を行ひ、各々實際的労働に努めつ、あり成績良好な



謝状

りと云ふ

この記事にある園芸は、園芸課の準備のためかと思われる。いつまで続いたか不明である。

・大正十一年六月十一日（一一五一号）

#### 実践女学校昇格計画

実践女学校にては今回その専攻科を改良して、目白、淀橋程度の専門学校組織とし、新に大學の名をすべく目下計画中、そのため寄付金勧誘を始めつゝありと

・大正十一年六月二十五日（一一五三号）

#### 下田女史女子大學設立

実践女学校長下田歌子女子は現在の動向を昇格して百五十万圓の豫算を以て約六ヶ年計画にて「女子高等学校」及び新大學令に據る「女子大學」を設立すると、なりたり同校出身者より成る櫻岡窓會は前期計画促進の爲第一期百萬圓第二期五十萬圓の資金を募集し母校の計画を達成しむべく近く後援会を組織すると

・大正十一年九月十七日（一一六五号）

#### 下田歌子女子の奔走

実践女学校長下田歌子女子は高等教育振興のため同校を擴張して大學部を設置する計画をたて某々有力者を説いて老いの身も厭はず熱心に奔走中なりと

この時歌子は六十九歳だったが、大正七年（一九一八）四月に設立された麻布の順心女学校の校長に就任しており、また大正九年（一九二〇）九月には愛国婦人会第五代会長になり多忙であった。この間の大正八年（一九一九）七月に実践女学校の経営を補佐し実務の中心にあった副校長の青木文三が死去し、井出豊作たち教職員が歌子の補佐を務め、教え子の本野久子が青木文三に代わり理事に就任した。さらに大正十年（一九二一）六月に明德女学校校長に就任する。明德女学校は通信省女子従業員のための夜間女学校である。

また歌子の私生活にも変化があった。歌子から明石為次に宛てた四月廿日付けの書簡（封筒の消印の日付は大正十二年四月二十一日）には次のように書かれている。「愚弟諦藏事去一日より宿病増進の模様にてひかずと手術致し候所一時少し見直し候様に有之候ひしも又々一昨日来漸次重患に相成本日は全く昏睡の状態に有之候医師も多分こゝ、兩三日ならでは生存むつかしからんと申出候」。弟の諦藏の病状が悪化し死期が迫っている。諦藏が死去の時には頼れる親戚がなく困っているもので、そのときは二日間上京してほしいと依頼しているものである。『下田歌子先生傳』や『実践女子學園一〇〇年史』では三月二十一日に諦藏が六十四歳で死去したと記しているが、四月を誤って記した

ものだろう。

明石為次は、歌子の従弟にあたる。『明石八十年史』によれば、為次の父範貞は天保十年（一八三九）六月に平尾琴台（東條）の次男として岩村で出生した。琴台は平尾歙藏の女貞（歌子の祖母）と結婚するが、岩村藩の藩学が佐藤一斎、若山勿堂を中心とした程朱学が主流で、琴台の師の太田錦城らの経済や実学に重きを置く折衷学派と対立し、やむなく離婚して平尾家を去った。範貞は嘉永五年（一八五三）に明石健太夫の養子となり、明石姓となった。為次は明治六年（一八七三）に出生、明治十八年（一八八五）から二年間、麴町一丁目の下田家に寄寓し、書生兼玄関番として住み込み勉学に打ち込んだ。明治三十年に浜松に明石石油株式会社を設立し、昭和八年（一九三三）に死去した。明石為次も歌子の支援者の一人として、千円の寄付を申し出ている。

### 関東大震災と拡張事業

大正十二年（一九二三）九月一日十一時五十八分に関東大震災が発生し、神奈川県・東京府を中心に千葉県・茨城県から静岡県東部までの内陸と沿岸の広い範囲に甚大な被害をもたらした。百九十万人が被災、十万五千人が死亡・

行方不明となった。被害の中心は神奈川県で、建物の全壊は十万余棟、焼失は二十一万二千余棟であった。昼食の時間に重なっていたため火災が発生、当日能登半島付近に位置していた台風により関東全域に風が吹き、火災旋風を引き起こしながら広まり、旧東京市の四十三パーセントを焼失した。（巻末図版一参照）『東京府大正震災誌』によれば内務省、大蔵省、文部省、農商務省、通信省などが全焼、大学などの教育機関は、東京帝国大学図書館、東京女子高等師範学校、明治大学、日本大学、中央大学、聖心女子学院、大妻高等女学校、共立女子職業学校などが全焼した。実践女学校は被害がほとんどなく、大妻高等女学校幹事の西野辰五郎は実践女学校の教室借用の旨を申出てきたので承諾し、大妻高等女学校は二十五日に移転してきた。同日に震災以来閉校の状態だった実践女学校は授業を再開した。

各救護団体、社会事業団体が救援活動を行った。歌子が会長を務める九段の愛国婦人会本部は類焼を免れたので、事務室七室を九段郵便局の避難所として提供し、それ以外の本部建物を全部開放して一般罹災者を収容するほか精華学校などに避難している罹災者約二千名に炊出を行った。小児、婦人、老人救済に全力を尽くすという方針に基き綿ネル単衣用材料を購入して衣服を調整した。義捐金十五万

を臨時震災救護事務局へ、三万五千円余を在郷軍人本部に寄贈し、罹災婦人の職業紹介などを行った。愛国婦人会の義捐金の総額は三十三万五千余円、物資百九十三万八千余点、救済人員二十五万五千七百余人に達した。

実践女学校では愛国婦人会に寄せられた被服材料（布）を引き受けて、生徒がミシンをかけて小児の衣類を調整した。実践女学校の職員の中には火災にあった者がいたが死者はなく、類焼にあった生徒の家庭があり、死亡した者が三名あった。男性職員は、焦土となって死屍がある街路を歩き、罹災職員生徒の家庭を慰問し慰問品を届けた。

麻布区三河台町にあった顧問の床次竹二郎の邸宅は、火災の被害にあった。歌子は、九月二十日付けの床次竹二郎宛の書簡（四五八九）で見舞いに行けないことを詫び、教職員や生徒の罹災状況の調査で少数の死者があること、拡張後援会事務所は被害が少なかったと報告をしている。

歌子は大正十二年後半から大正十三年にかけて、校務を犠牲にして愛国婦人会の救済事業を行った。竹内貞三は、関東大震災発生のために後援会事業の寄付金募集が頓挫したことが動機となって、大正十四歳晩ごろに表面に出てこの事業に関わったと前出「本稿擴張十年計案案に就いて」の中に記している。財界が数年前から下り坂になっていて寄付の依頼を言い出せない時勢で、震災の影響もあり、改

めて寄付金の募集をしたくなく資金集めに苦慮したと記している。後援会の寄付金が数万円あり、これを基礎として鉄筋校舎の建築に着手した。

震災後の大正十三年、十四年の二回、皇后からお手許金二千五百円ずつ計五千円が下賜された。『下田歌子先生傳』の「過ぎにし跡（その二）」で歌子は、高齢であるにも関わらず身体に無理をしていたためもあり、耳が遠くなっていたと書いている。そうした歌子を支えて、当面の事業にあたったのは柿沼顧問と竹内貞三であった。歌子は大学と専門学校の設立を発表していたため、計画を中断撤退することはできず、事業を進めていった。

大正十五年（一九二六）二月に仮称第一鉄筋校舎の起工をし、同年十一月二十日に竣工式、仮称第二鉄筋校舎の工事昭和二年（一九二七）六月に着手した。専門学校令によって大正十四年（一九二五）一月三十日に女学校高等女学部専攻科を専門学部昇格改称した。この年の四月には、専門学部国文科卒業生に対し国語科中等教員無試験検定の特典を受けた。専門学部昇格するにあたっての附帯条件に、理化学教室、割烹教室の完備が求められていた。この校舎は昭和三年（一九二八）三月に竣工した。第二期工事として十一月十日に陸奥記念館を竣工した。

歌子の生存中に大学設置は実現せず、実践女子大学の設

置認可が下りたのは昭和二十四年（一九四九）二月であった。文家政学部の一学部に、国文、英文、家政の三学科を設置した。

### 蜂須賀笛子と下田歌子

ここでは筆者が所持している大正六年十月三日付、蜂須賀笛子宛下田歌子書簡の紹介と下田資料として所蔵されている蜂須賀笛子宛書簡を合わせて検討し、笛子と歌子の関わりを探る。

下田資料の中には蜂須賀笛子に宛てた書簡が三十通保管されている。書かれた年が不明のものもあるが、大正七年（一九一六）三月頃から昭和十一年（一九三六）八月四日までのもので、筆者が所持している書簡が最も早い年代のものである。

略年譜によると、その間に笛子の祖父茂韶が大正七年（一九一八）二月十日に七十三歳で死去、二月二十七日には徳島で告別式が行われた。大正八年（一九一九）十二月十九日に三田綱町の蜂須賀家本邸が火災のため焼失した。それから間もない十二月二十四日に、笛子は松田正之と結婚、大正十年（一九二二）に正氏は英国ケンブリッジ大学に入学し、大正十一年（一九二二）十月一日に妹の小枝子

が、翌年の十月四日には祖母随子が死去する。蜂須賀邸には多い時で八人の家族がいたのに、娘たちの結婚と正氏の英国留学、そして随子の死で正韶は一人になった。正韶は大正十三年（一九二四）一月十六日に貴族院副議長に就任（昭和五年任期満了で退任）する。

年子の結婚の年月は明らかではないが、『大名華族』の記述を読むと、二十歳の時に夫になる松平康春と会い、二十一歳で結婚したとあるので、大正六年（一九一七）の年に結婚したことになる。この縁組は茂韶と松平康春の父との間で取り決めたものであった。津山松平家は本郷に本邸があったが、九段の靖国神社の前に家を建てて別居した。昭和四年（一九二九）四月十五日に正氏が帰国、昭和五年（一九三〇）十月十四日に笛子は松田正之と協議離婚をする。女子を四人出産、五人目に男子を出産した年子は、蜂須賀家にもどり、離婚の意思を病床の正韶に伝えた。その翌日に正韶は脳溢血でたおれ、昭和七年（一九三二）十二月三十一日に死去、六十一歳であった。年子は昭和九年（一九三四）四月に離婚届を提出した。昭和十年（一九三五）一月に笛子は『松浦宮物語』（岩波文庫）を校訂し刊行する。年子は正韶の死後にホームズパンと染色の仕事を始め、昭和十一年（一九三六）に日本橋高島屋で「蜂須賀年子手芸展」を開催する。昭和十二年（一九三七）に笛子は、渋谷

区千駄ヶ谷にて死去した。

次に筆者が所持する蜂須賀笛子に宛てた下田歌子の書簡を紹介する。(巻末図版二)

【書誌】

書簡本文

墨書 三十行

縦一八・二種 横八一・四種

封筒

墨書

縦一九・三種 横六・四種

表書 芝区三田綱町

蜂須賀笛子様

御もと

裏書 十月三日

赤坂区青山北町六

下田歌子

消印 三田局 6・10・3

【翻刻】

野分のあしたをかしきものと

いひけんあはれも過ぎて

すさまじかりし一夜を辛うじて

明し侍りしをやうく早光

見え侍りてはなかくくに

うとましう荒れまどひたる

垣根ついではさるものにて学びや

の一部の瓦さへこの葉のやうに散りとひ

たるいとけうとう覚たる

そは物の数にも侍らずこのをしへ

子などにはいづち往にけんと尋ね

わび侍るに候へとも侍るかしされど

もおのれが庭はいと引き入りて

のどかならすかし明との風さへ

人数にはおぼえで過ぎけんよと

をかしようもいとほしようも

おぼえはべるかなさはれ

鉢のうちの葛かづら皆もみ

ぢもあへずかくはなりはて

侍るぬるを花ならねどあはれしれ

候はん御あたりにとてなん

うとましき野分の風も

嬉しきは君が言の葉

得たる也けり

と思ふころ物狂ほしや

あはれく　　かしく

(追而書)

まづあわたゞしきほどの

乱り書とくやり捨て候へや

この内ながらわかのかしは木の

おもにも

よくつたへ被下候や

十月三日朝

はちすか　　しもた

笛子の君　　歌子

御もとへ

台風の去った翌朝に書かれたものである。すさまじい台風で辛うじて一夜を明かした。学校の屋根の瓦は一部がこの葉のように飛んでしまい、教え子たちの様子が気がかりである。うとましい野分であるけれども、嬉しいのはあながたが私を氣遣ってかけてくれる言葉である。落ち着かない

思っている。あわただしく乱れ書きしたので、すぐに捨ててくだるようにというものである。『源氏物語』などの古典文学作品を思わせる文章である。文中の「わかのかしわ木のおもと」とは笛子の弟正氏のこと、この書簡以外にも出てくる表現であり、親密さを表していると考えられる。次に歌子と笛子の関わりを具体的に示す書簡について記す。

・大正七年十二月二十七日(八九四)

笛子からの茂韶の喪のため詠進を提出するのを取りやめるといふ申し出を承った。かしわ木の御もとは頼もしく思っておりますとお伝えくださいという内容である。大正七年の一年間は茂韶の死去により喪に服している。そのため、笛子は新年の歌会始めの詠進歌の提出は取りやめるといふものである。歌子はこの申し出を、素晴らしい和歌を奉るよりも増さっているとほめている。

歌子は華族女学校で指導していたときも歌会始の詠進歌を指導し、提出させている。笛子にも詠進歌の提出をすすめていた。

・大正八年六月二十八日(八九六)

笛子の病状が快方に向かっていることを喜び、二十九日(日曜)に小田原に行くのでほんの数分でもお尋ねし

たい。午後三時頃の予定である。

この手紙は病氣療養先である神奈川県相州酒匂村松涛園に滞在する笛子に宛てたもので、絵葉書（石山寺月見亭）に墨書したものである。

・大正九年八月一日（九〇四）

笛子は松田正之と結婚した。以下は結婚後の笛子に宛てた書簡である。

笛子に依頼された写真を送る。「御うぶやにもこもり給はゞ」とあるので、笛子が身ごもったことが知られる。また『万葉集』をよく読むようにとある。笛子が無事に出産したかどうかは不明である。系図によれば、松田正之には二人の娘がいるが、笛子と離婚後に再婚している。宛先の住所は「市外上駒込一二三」となっているので、結婚後の住所であろう。

・大正十五年三月四日（九〇七）

笛子の入院に驚く。いつ退院できるのか、また退院したら電話で知らせしてほしいというものである。宛先の住所は「小石川区駕籠町神尾分院内」で、ここでは「扶盈子」と表記している。

・昭和五年一月二十五日（九〇九）

書簡三通のほかは詠草を添削したものが一通ある。文中に「萬づの事は温泉に流して、たゞひた向きに御迷の

後つくるひ果て給へかし。かくて後の更生に新しき巷の海を見いでて船出し給へよ。己れ船長となりて導き参らせなん」（句読点は筆者）とあり、笛子が離婚を決意したと思われる。歌子は笛子の新たな出発を励ましている。笛子から送られてくる和歌を添削、指導をしていた。宛先は「芝区白金三光町七九」、松田扶盈子である。笛子はこの年の十月十四日に松田正之と協議離婚した。

・昭和五年十一月二十九日（九一〇）

笛子の病に驚く。五年の年月の間に苦境にあつたあなたなので、来年は必ず光が見えることだろう。心を強くして療養するようにと笛子を励ましている。宛先は蜂須賀家の本邸「芝区三田綱町九」で蜂須賀笛子と表記している。

・昭和八年一月四日（九一五）

正韶が十二月三十一日に死去した。歌子は熱がようやく下がったので筆をとった。果物は正韶の御霊に、笛子には造花を贈る。「去年汽車の中へ故父君の殊更に在してつくば」と御うへ打ち頼ませ給ひ「君在せはまづ安心して打ち任せ聞ゆ」との給ひしかば」とあり、正韶から笛子を頼むといわれたことを記している。正韶が歌子を信頼している様子がうかがわれる。宛先は「三田綱町蜂須賀扶盈子」である。

笛子から歌子に宛てた書簡が残されていないため詳細が不明のままであるが、歌子の書いた書簡の多くは、笛子の病状を気遣い、その悩みに応え励まそうとするものである。そこには笛子が歌子を信頼している様子が察せられ、また歌子が病弱で不幸な結婚をした笛子に対する同情と思いやりだけではなく、深く愛情を注いでいる様子が見える。

笛子は、文学の才能が豊かな人だったのではないだろうか。後に笛子は『松浦宮物語』（岩波文庫 昭和十年刊）の校訂をしているが、そのことも彼女の才能の一端を示すものである。母を早くに亡くした笛子にとって歌子は師であり、心の内を語ることでできた人であったのだろう。

「なよ竹」第十三号（大正十四年十月）の「小萩の露」は、歌子に和歌の指導を専門的に受けるという文学部の参加者の和歌が掲載されている。兼題は「草庵に蟲を聞く」「楠正行瓣内侍を救ふかた」「萩」「野蟲」（大正十三年九月）、「曉霧」「月夜訪共」「漁村擣衣」「張良」「遠村擣衣」（同年十月）、「垣朝顔」「秋風入簾」（大正十四年九月）である。文学部は概ね月二回開かれていて、笛子は詠草を提出しているが、文学部に直接参加するということではなく、歌子を通して文学部に詠草を提出していると思われる。

次は松田笛子の名で「小萩の露」（「なよ竹」第十三号 大正十四年十月）に掲載されている和歌二首である。

曉霧

世の中のちりもけかれも立ちかはすさきりに清し暁には  
張良

老人に靴をさ、けし手にこそは天の下をもなておさめけめ

また下田資料の中に『春の旅』（二四九三）と題する旅行記が所蔵されている。笛子の詠草の文字と照合すると自筆と判断されるもので、作者名を「竹 由子」と、自身の名前の笛の一文字を分けて表記している。『春の旅』と笛子の和歌については調査を継続し、別の機会に報告したい。

「高島伊都子談話筆記」（下田資料三〇〇三）の中に、笛子についての談話の記録が収録されている。昭和四十四年（一九六九）二月に館石寿子（旧姓海保、実践女学校専任部昭和九年卒業）が語ったもので、山口典子が筆記し記録として残したものである。山口典子は実践女子大学図書館で特殊コレクションを担当、現在の下田歌子関係資料と称するコレクションの基礎を作った。

館石寿子は笛子について次のように述べている。

笛様は、身体が弱かったので、蜂須賀侯爵家の姫として深窓に育ち、特に学校教育は受けなかった。新球三千代（女優、宝塚歌劇団出身）のような、もつとく美しいたおやかな人であった。

彼女の結婚は不幸であった。蜂須賀、有馬、松田の三氏は親友の間柄で、松田氏急逝によりあとが絶えたので、有馬頼寧伯の次男と蜂須賀笛子とで夫婦養子となり松田男爵家を継いだ。

彼女が結婚を決意し、下田先生に相談したりした。

聴講生となって予科に入学したとき、同級になったのである。はじめは松田さん／＼とよんでいる時は身分が分からなかったが、あとで蜂須賀姓に戻ったとき、はじめて華族さんだと分かった。のちに早大の哲学科を聴講、そこで学生と恋愛して（十五才年下だった）昭和十二年頃なくなった。三十九才だった。その恋愛は純粋な恋愛だった。

U氏とかいうその人は笛子の没後本郷のある薬局の娘と結婚したが、二年くらいにその夫人は急逝した。又キリスト教系の大学に入って後再婚したが、その夫人も亦一年位のちに雷に打たれて急死した。それでU氏は、沢木興道老師に私淑し、出家してしまった。

『大名華族』の中で、年子は聖心女学院から帰ってくると、十二人の家庭教師がいて数学、国語、英語などを学習したとある。健康な年子は学校教育を受けることができたが、病弱な笛子には家庭教師をつけて学習させたとと思われる。

年子は自分の結婚について何も知らされず、夫となる松

平康春に引き合わされる。そのことについて父の正韶に「いくら何でも、時代は変わっているのですから、私の結婚については本人の私に……」と涙ぐみながら話したと書いている。年子は時代が変わっていることを意識していた。

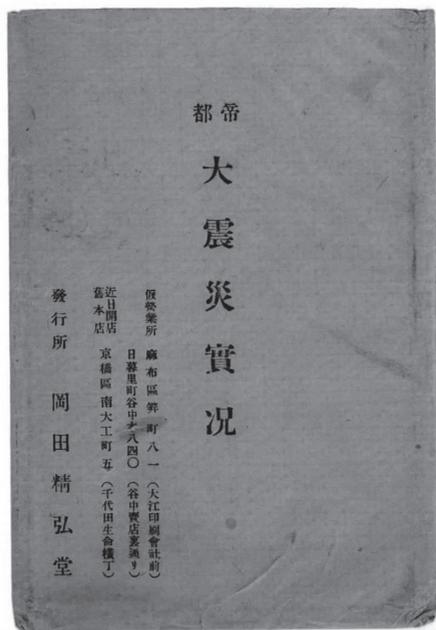
年子は『大名華族』の中で「女は道具である」と述べている。自身の結婚も、後継ぎを生むための「道具」との思いがあったのだろうか。笛子もまた父の定めた相手と結婚し、苦しい思いをして離婚する。関ヶ原以来の家を重んずる蜂須賀家にも新しい時代の波は押し寄せていた。家が大正とする正韶に、年子は人が大事と言いつける。年子も笛子も精神的に自立した女性として、新しい時代に自身の生き方を模索していたのではないだろうか。

蜂須賀茂韶、正韶、正氏の肖像写真は徳島市立徳島城博物館所蔵のもので、図版として掲載するにあたり御配慮、御許可をくださいましたことに感謝申し上げます。本稿を書くにあたり、多くの方々にご指導ご教示をいただきました。特に福島弘子氏、徳島市立徳島城博物館の小川裕久氏には、蜂須賀家に関する文献などについて御教示、御協力をいただきました。心から感謝を申し上げます。

## 参考文献

- 蜂須賀年子 『大名華族』 三笠書房 一九五七年
- 坂本辰之助著 『現代名士人格と修養』 帝国文学通信社 大正九年（近代デジタルライブラリー）
- 湯浅嘉一編纂 『明石八十年史』 明石八十年史刊行会 昭和四十九年
- 徳島市立徳島城博物館編 『徳島市立徳島城博物館官収蔵資料目録 第1集 蜂須賀家寄贈資料』 徳島市立徳島城博物館 一九九七年
- 東京府編 東京府大正震災誌 中外書房 昭和四十六年  
（原本大正十四年刊 複製縮刷版）
- 実践女子学園一〇〇年史編中纂委員会編 実践女子学園一〇〇年史 実践女子学園 平成十三年
- 故下田校長先生傳記編纂所編 下田歌子先生傳 故下田校長先生傳記編纂所 昭和十八年

（おおい みよこ・実践女子大学非常勤講師）



發行所 岡田精弘堂



市内倒壞家屋



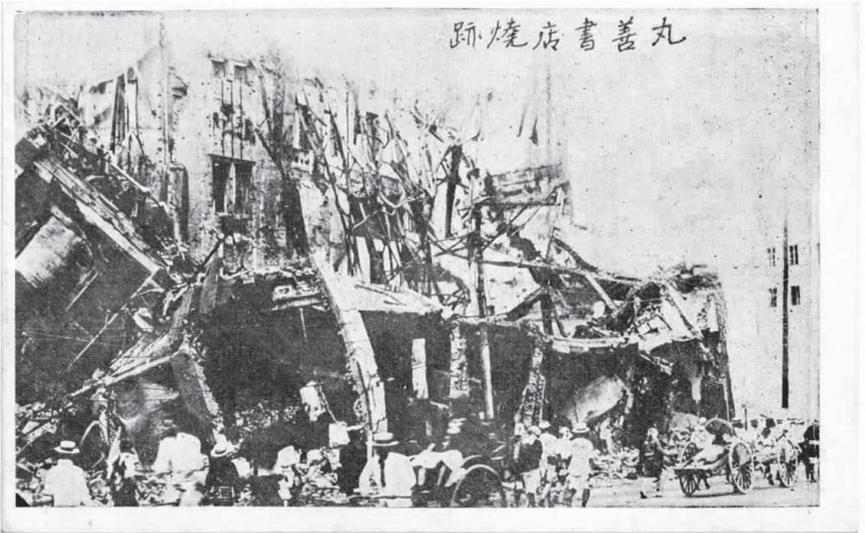
配給米に蝟集する宮城前の避難民



築地農商務省附近の焼跡



日本橋方面の焼跡



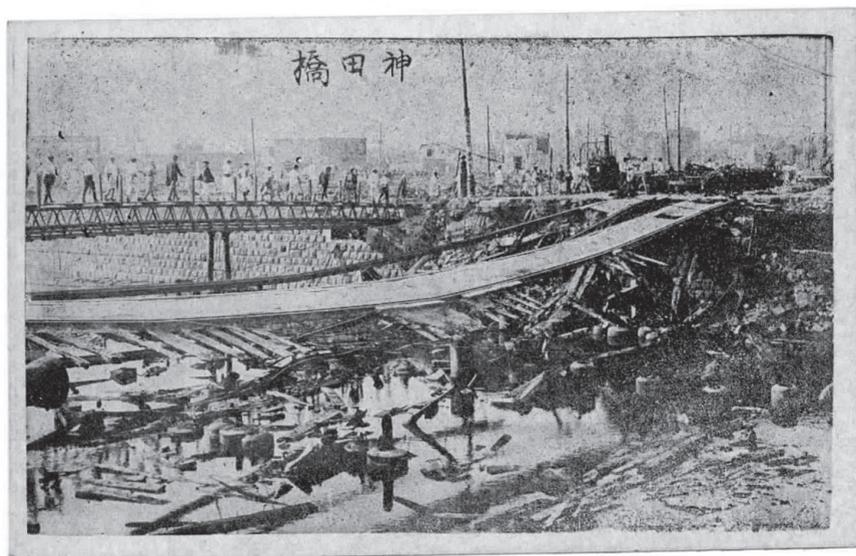
丸善書店焼跡



三越焼跡



京橋方面



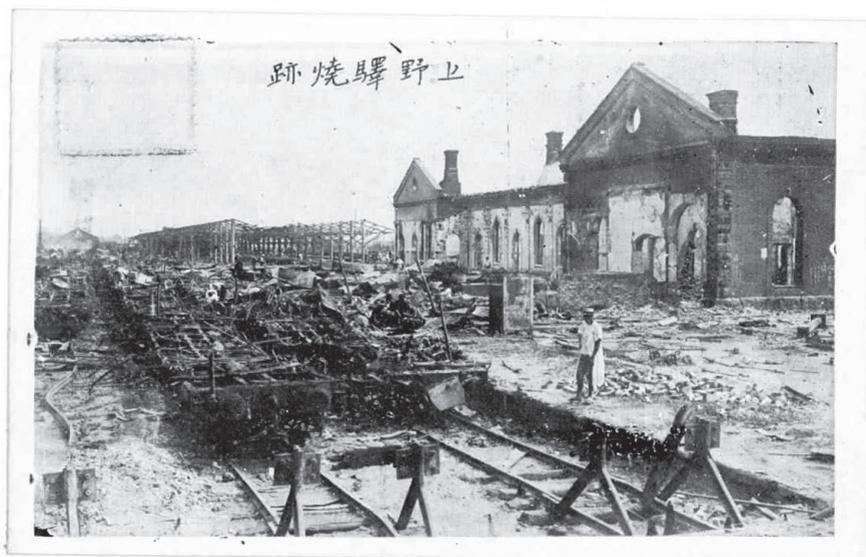
神田橋



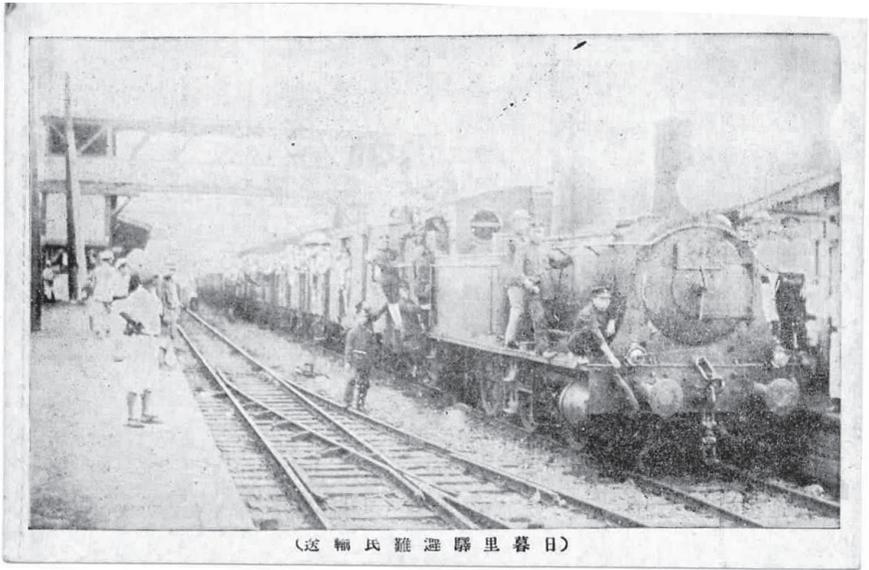
萬世橋驛及須田町燒跡



上野廣小路燒跡



上野驛燒跡



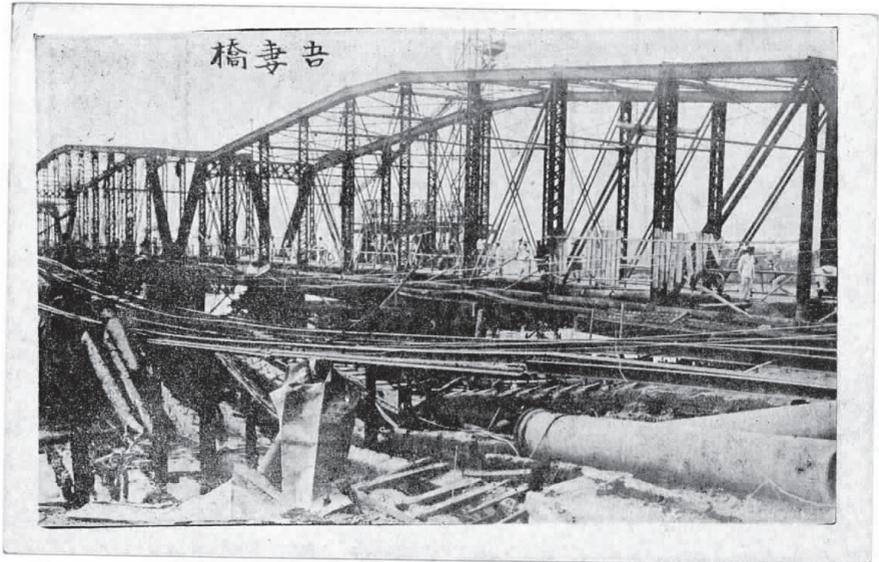
(送輸氏難避驛里暮日)

日暮里驛避難民輸送

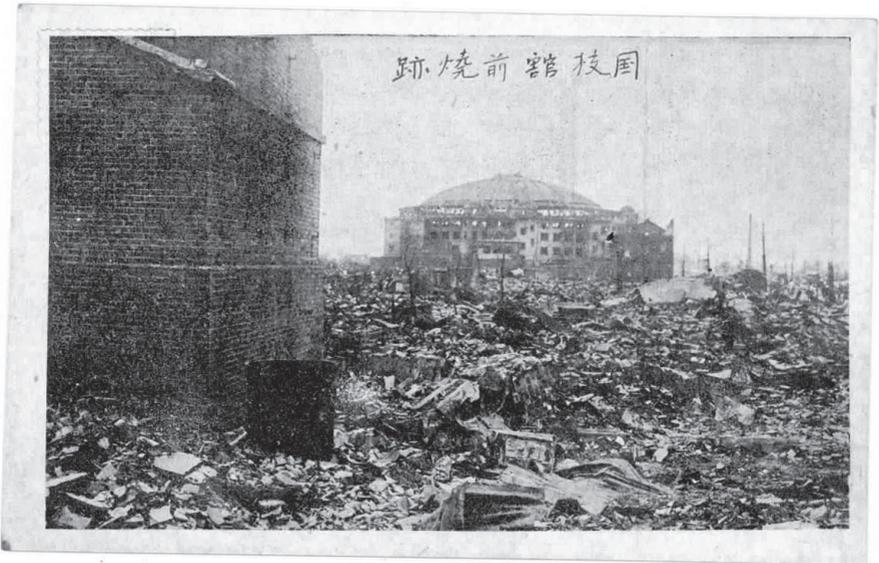


七塔を塔の壱五及門王仁より世見仲草浅

浅草仲見世より仁王門及五重の塔を望む



吾妻橋



国技館前焼跡





